

2021 年度学位記授与式 式辞

神戸松蔭女子学院大学
学長 待田昌二

皆さん、ご卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

本日ご列席いただきました保護者、ご家族の皆様、ライブ配信をご覧の皆様に対しましても祝意をお伝えいたします。

新型コロナウイルス感染症が我々の生活に大きな影響を及ぼすようになってから2年が経とうとしています。マスクをせずに外出していたことは遠い昔のように思うことさえあります。この2年の間、皆さんの学生生活に様々な制限を課さざるを得なかったことは、残念なことであり、申し訳なかったと思います。

コロナ前と様変わりしてしまったことはいくつもあるのですが、その一つが食堂です。テーブルにアクリル板のパーティションを設けて、食事中に会話しないよう求めていました。これは大学に限ったことではなく、飲食店全体に対する制限は私たちの身近で起こった変化の中でも最も大きなものの一つでしょう。マスクを外しての近距離の会話による感染リスクが高いことは明らかですので、やむを得ない措置ではありますが、食事の大きな楽しみが奪われてしまいました。

とはいえ、単に嘆くだけでなく、今の状況の中で楽しめる部分を楽しむべきでしょう。食事の楽しみはもちろん、まず、第一に、食べ物そのものにあるわけですから、パーティションに囲まれて一人黙って食べる方が食事そのものに向き合っていると考えることができます。ラーメン屋に味集中カウンターができたのも、孤独のグルメが人気になったのもコロナの始まる前ですから、コロナになって仕方なくではなく、食そのものに向き合うことも人間の大切な楽しみです。

人と一緒に食事をすることに戻りますが、会話がなくても楽しい場合があります。それは、人が食べるのを見る楽しみです。美味しそうに無心に食べている様子を見ると、なんだかうれしくなります。自分が食べるためというより、食べてもらうのが嬉しいから料理をするという人もいるでしょう、自分が食べるためというより美味しいと喜んでいるところを見たいから食事をおごることもあるでしょう。

私たちはそれどころか、動物に食べ物を与えるのも好きです。イヌやネコはもちろんのこと、ハトなどの鳥にも、亀や鯉にまで頼まれもしないのに餌を与えます。亀や鯉が私たちに感謝してくれることや話しかけてくれることを期待しているわけではないでしょう。懸命に食べているのを見ているだけでなんだか嬉しくなります。

他の種類の動物に食べ物を与えるというのは、当然ですが動物としてとても珍しいことです。私たちが他の動物と違って、命を尊重する高度な道德を持っているからでしょうか。そうではないでしょう。小さな子どもでも動物に餌を与えたりします。人間に備わっている性質と呼ぶべきものです。恐らくは、親が子に食べ物を与える性質が、同じ仲間食べ物に分け合う性質に、さらには他の動物に食べ物を与えるところまで広がったと考えられます。

親が子に食べ物を与えるというのは、生物にとってあたり前のようですが、そんなことはありません。ウミガメの子どもが卵から孵化して砂の中から出てきたら、誰の助けもなく大海原に出ていくように、卵や子を産んだら後は何の世話もしないという生き物が大部分です。高等な動物だから親が子どもに食べ物を与えるかという、そうとも限りません。例えば、ツバメは生まれてきた雛に餌を与えます。阪急六甲の駅でも毎年のようにツバメの子育てが見られますが、雛が育ち盛りの頃には数分ごとに親ツバメが餌を持ってきます。一方、カルガモやマガモなどカモ類の鳥は雛に餌を与えません。ではカルガモが雛を大事にしないのかということはありません。いつも雛のそばにいて守ろうとします。子どもに食べ物を与えるかどうかはその動物の持っている強い性質であり、カルガモには子どもに食べ物を与えるという発想自体がないのです。

このような違いは、食べ物の違いによって進化したと考えられます。主に飛びまわって虫を探しているツバメでは雛が自分で虫を捕まえることは困難です。一方、カモ類では水草などを食べており、親は雛を食べ物がある場所に連れて行くだけです。鳥ではなく哺乳類でも同じことが言えます。動物を捕えて食べるオオカミは、捉えた獲物を子どものところに持ってきて与えます。草や葉っぱを食べるシカやウマは、よく噛んで消化しやすくした草を子どもに与えるといったことさえしません。子どもに食べ物を与えるというのは、その動物が高等かどうかによるものではありませんし、子どもに愛情を持っているかどうかによるものでもありません。その動物が生まれ持った性質によるのです。

人間は、子どもに食べ物を与える性質を持っているだけでなく、その性質がさらに拡張されて同じ仲間や他の動物に食べ物を与えるようにさえなりました。私たちが動物に餌を与えるのは、動物が近づいてきて一所懸命に食べる様子を見るのが単にうれしいからです。しかし、子どもが親から食べ物をもろうことによって生きて行けるように、多くの動物にとっては食べ物をもらせることは文字通り命を助けてもらうことになります。

人間は、他者と助け合い協力することで他の動物とは格段に異なる社会を築き上げました。そのような社会を築き上げる出発点は、私たちが自分の子どもだけでなく、身近にいる人たちが美味しそうに食べる様子を見るのがうれしい、という珍しい性質を持っていたためではないでしょうか。自分がたまたま多めに食べ物を持っていたら、身近にいる人たちと一緒に分け与え、別の機会には逆に食べ物を分けてもらえることで互いに助け合う関係が強まります。さらに人間には、高度な記憶力と予測する能力があるので、このような助け合う関係を作ることが

有利であることを理解して、さらに関係を発展させていくために様々なルールや決まり事を作り今の様な社会を作り上げてきました。しかし、もともと私たちには、他者を助ける性質が埋め込まれているのです。

高度に組織化された現代社会では、他者への援助は行政の仕事になるなど組織化され、自分たちの直接の問題ではないかのように普段は感じています。しかし、行政だけでは対処できず、行政といった仕組みを越えて助け合うことが必要な事態はしばしば起きていることです。

今の日本には地震など大きな自然災害のリスクが常にあります。今から4年近く前、2018年の6月には大阪北部地震がありました。朝7時58分の出来事でしたので、通学途中の電車の中にいたという人も多かったと思います。大学は臨時休校になりましたが、自宅に戻るのもたいへんだっただしょう。それから3カ月も経たない9月初めには北海道で大きな地震があり、一時北海道全域が停電しました。山があちこちで大きく崩れた映像は衝撃的でした。そして先日、東北地方の太平洋沿岸で震度6強の大きな地震があり、11年前の東日本大震災を思い返した人が多かったのではないのでしょうか。東日本大震災では、数十万の人々が避難生活を余儀なくされました。行政による組織的支援だけではとても対応できませんでしたが、避難生活を支えるためにボランティアの人たちが集まり、多くの寄付が寄せられました。私たちの道徳意識や理性的判断による部分もありますが、やはり根底にあるのは、たとえそれが知らない人であっても、食べる物にも困っている状況を目にするのは辛いという気持ちからではないのでしょうか。

遠く離れた地ではありますが、今ウクライナでは、東日本大震災の避難者とは桁違いの、1千万人という人たちが戦争という理不尽な暴力によって家を離れ、避難生活を強いられようとしています。驚くべきことに、ポーランドをはじめとする周辺国の人たちは、数百万もの人たちを受け入れ食べ物や寝る場所を用意するという途方もない努力をしています。もちろんそこには、ウクライナの戦争を自身の事と感じざるを得ない歴史的・政治的状況があるからですが、根本にあるのは、食べるのも困っている人を見過ごせないという人間の素朴な感情でしょう。

残念ながら新型コロナウイルスへの警戒は未だに続いています。食事をしながら自由に会話できるのはもう少し先になりそうです。それでも私たちには自分自身が食べる喜びがあること、人が食べているところを見る喜びがあることをかみしめたいと思います。そして、少しでも多くの人と同じ喜びを得られるよう、できることを考え実行していきたいと思います。

今皆さんは大学から飛び立とうとしています。皆さんにとってかけがえのない時期を過ごす場としてこのキャンパスを選んでもらったことは、私たち教職員にとって本当に嬉しいことでした。ともに過ごした日々は忘れがたい大切な記憶です。皆さんがホームカミングデーなどの機会に大学に戻り、できれば食事をともにしながら、ともに過ごした日々について再び語り合うことを、教職員一同楽しみにしています。

皆さんのこれからの健康と活躍を心より祈念しています。